

2013年NHK大河ドラマ特別展『八重の桜』に関わって

講演	小枝 弘和〔こえだ・ひろかず〕
講師紹介	同志社大学同志社社史資料センター社史資料調査員

はじめに

2009年4月、新島八重がNHKのテレビ番組「歴史秘話ヒストリア」で本格的に取り上げられました。タイトルは「明治悪妻伝説初代 `ハンサムウーマン、新島八重の生涯」です。私にとって番組内で最も印象に残った場面は「鶴」の絵が登場した場面でした。かつて八重が当時学生であった徳富猪一郎（のちの蘇峰）に和服と洋装を合わせる姿を「鶴」と揶揄されたことをクロースアップした箇所でした。極めて一面的な見方であり、八重の本質を理解しようとする内容ではありませんでした。私の八重研究はこの番組「歴史秘話ヒストリア」に対する疑問と反発が出発点になります。

「歴史秘話ヒストリア」の放映の影響は同志社社史資料センターにも少なからずありました。これを機に大学でも八重に関する展示会を行うことになり、2009年秋学期に第36回 Neesima Room企画展『新島八重の生涯―進取と矜持』を開催しました。このときの意識は八重の和装と洋装それぞれに見られる彼女の矜持を、八重の資料を通じて見いだしてもらうことにありました。この展示会の準備に際し、福島県会津若松市を初めて訪れ、福島県立博物館、若松城天守閣郷土博物館のご協力を得ることができました。私と会津の最初の接点でした。

この企画展以降、八重に関する研究はさしたる進展もありませんでした。しかし、大きな転機が訪れました。2011年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災です。マグニチュード9.0の巨大地震は八重の故郷・会津を含め、東北地域に甚大な被害をもたらしました。地震に加えて、津波、福島第一原子力発電所事故など、未曾有の事故も重なり、依然として問題は残っております。2年前にお世話になった方々が会津で被災されているにも関わらず、私は震災後すぐに連絡を取ることができませんでした。取ることが怖かったと言えるかもしれません。

連絡を取ることができないままに震災から3カ月を経たころ、お世話になった若松城天守閣郷土博物館の学芸員さんから連絡がありました。震災による会津での被害は大きくはないが、原発事故による風評被害が深刻である、助けてほしい、という内容のメールでした。その数日後、会津へ向かいました。ちょうど2013年度のNHK大河ドラマは「八重の桜」、主人公は新島八重と決まった直後でした。

時を同じくして、大河ドラマに伴い、歴史資料を用いたNHK大河ドラマ特別展を企画するNHKプロモーションから接触があり、同志社からは私が担当者として特別展に協力することになりました。ドラマも特別展もその制作の意図は「『東北・福島に根付く不屈のプライド』で日本にエールを送る!!」ことにあり、この意図に沿う形で大学も「東日本大震災の復興支援を念頭に置いたこのドラマの意図に賛同する立場」を表明し、できる限りの協力を行うことを大学ホームページで表明しました。

特別展に協力することになりましたが、二つの大きな問題がありました。まず、新島八重研究者がほとんどいない。次に八重関連の未整理資料が多数存在したことです。未整理資料群としては600点以上の写真、200点以上の未解読書簡（日・英含む）が存在しました。これらを把握することなく、八重に関する研究は進みません。喫緊の課題は資料整理でした。

以来、1年にわたって資料を整理するなかで、2012年9月には福島県・白河市・二本松市主催の企画展『新島八重の生涯と戊辰戦争』に全面的に協力するなど、福島県との仕事もこなしながら、特別展の準備を進めました。

特別展に協力するにあたり、私が二つ決めたことがあります。一つは同志社史としての覚馬と八重の位置づけをどのように規定するかです。私は新島襄の草稿「私塾開業願」を利用しました。当時、個人で学校を設立するときには必ず京都府に申請しなければなりませんでした。そのときの下書きの文書が現在残っています（資料①）。草稿を見ると、その最後には襄の名前と同志社の結社人として覚馬の名前も連名で書かれています。要するに覚馬は同志社の創立者の一人です。八重はもちろん覚馬の妹であり、襄の妻である。よって、福島県は創立者たちの故郷であるという認識から、震災復興に関連するあらゆる事業に関わるという姿勢です。もう一つは同志社が八重の生き方に何を学び、実践するのかという資料的裏付けです。これについては、八重が神奈川県知事から贈られた感謝状を根拠にしました（資料②）。1899年（明治32）横浜の伊勢佐木町で3200戸を越える大火災が起り、多数の罹災者が出ました。八重は罹災者救済の名目で35円を寄付し、感謝状を受けています。八重と横浜の関係の深さは資料からは見いだすことはできませんでしたが、そうであればこそ、関係の有無は問題ではなく、世の中に手を差し伸べる精神性を八重はもっていたと考えられます。この姿勢を見習い、私たちは肅々と協力関係に基づき全力を尽くすことを決めました。

2013年NHK

大河ドラマ特別展

『八重の桜』とは

特別展は大河ドラマごとに開催される展示会です。通例、全国2、3カ所が会場となります。今回の会場は東京都江戸東京博物館、福島県立博物館、京都府京都文化博物館でした。八重ゆかりの作品を通して「戊辰戦争の敗戦から立ち上がる人々の姿を通して、復興へのメッセージを伝える」ことを共通の開催理念としています。特別展の内容を構成するにあたり、NHKプロモーションが中心となり、企画委員会が組織されました。会場となる各博物館から学芸員が1名ないし2名、同志社から私が1名、あとはNHKおよびNHKプロモーションの職員という構成です。このメンバーで1年にわたり、展示内容を議論する会議が月に1回のペースで行われました。

会議は比較的順調に進みましたが、いくつもの課題がありました。最初の問題は八重の知名度です。企画委員でも八重を知る人などいるはずもなく、学芸員ですら知らないものであれば、世間一般にも当然知られていないことは容易に想像できました。ドラマが始まるまでに周知活動は随分となされていましたが、それでも決して知られた人物ではありません。また、特別展を企画するためには、ドラマに関する情報が必要であるとの認識から、NHKやNHKプロモーション側に登場人物やストーリー展開に関する情報提供を呼びかけてもらいましたが、会議が行われた1年間、何の情報も寄せられませんでした。さらに、NHKは八重をハンサムウーマンと称し、キャンペーンをしましたが、これも大きな問題をはらんでいました。資料に基づいてこの「ハンサム」という言葉を解釈すると、外面の優れた様ではなく、内面の美しさの賞賛になります。ところが日本語で聞く「ハンサム」という言葉のニュアンスは外面を指すように受け取られ、襄が例えた言葉とは全く違う意味に受け取られる可能性があります。とにかく、外部の目を意識した資料や情報の扱いを一から整理する必要がありました。他にも、午前中から深夜3時まで続く図録作成作業、年表、人物紹介、小学生用リーフレットの作成など、さまざまな仕事がありました。

学内においても、予想できたことではありませんが、最も困ったことがありました。今回はNHK・福島に全面協力すると言いましたが、これは同志社内では八重に関わる資料の展示会を一切行わないことを意味します。資料がすべて出払うからです。学内の会議で確認し、了承も取っていたのですが、いざ大河ドラマが始まると、今こそ八重の企画展を行うべきだという声が出てきました。確認しながら事を進めても、なかなか簡単にいくものではありませんでした。企画委員に迷惑をかけず調整しながら、結果的には学内の八重の企画展は実施いたしました。

八重の資料を
どう読み解くか

では、特別展の内容構成となりますが、最大の問題は八重が自身の所感や心情を書き残した文字の資料が非常に少なかったことでした。たとえ残っていたとしても、若松城龍城戦にまつわるエピソードが多く、細やかな心の機微を窺えるだけの資料が現存しません。そこで、現存する資料から窺える八重の心情や考えを資料に忠実にできる限り見いだすことを目指しました。いくつか具体的な事例を挙げていきます。まず、八重が襄と結婚したときの心境はどのようなものであったのか、誰もが知りたいところですが、文章としては残っておりません。ここで私は八重旧蔵品の「手芸品」に着目しました。「手芸品」の表面は、いわゆる布を切り貼りして花の形を模した貼り絵で、「山本八重」の印があります（資料③）。状況から見ればまず結婚前の資料と考えてよいかと思います。ただし、興味深いのは裏面です。裏面には、やはり同じくして赤い墨書で「山本八重」とあり、さらに鉛筆で筆記体で何かを書いています。よく見ますと「Neesima Yaye」、「Yaye Neesima」、「Joseph」などと書かれています（資料④）。前者二つは八重の結婚後の名前です。後者は襄を指します。結婚前に自身が作成した作品の裏面に結婚相手の名前や結婚後の姓を自身の名に連ね、アルファベットで何度も練習した八重の気持ちをみなさんはどのようにお考えになりますでしょうか。私は八重が襄との結婚を受け入れていたことを示すのではないかと考えました。

次に八重の洋装姿の意味は何か、という問いを自身に投げかけてみました。八重に関する認識が以前と比べて広がってきた今では、京都時代の八重の姿といえば洋服を召した姿を思い浮べる人が多いかと思います。この問題の解決には、そもそも明治時代に写真を撮り、今まで残すということの意味から考える必要があります。当時は現在のようにスナップ写真など存在しません。撮影場所は主に写真館です。また、一般世帯で写真を撮影する習慣など、ほぼない時代とお考えください。残す被写体（人物、服装など）にはそれなりの意味があったはずです。この意味で八重は洋装姿を後世に残してもかまわないと考えていたはずで、さらに八重の写真を見ていくと、八重が洋装姿を残したのは襄の生前に限られます。つまり、襄の永眠後には八重は洋装姿を写真に残していません。加えて、八重が襄と結婚していた14年間の八重の肖像写真を見ると、洋装の写真と同枚数程度の和服姿の写真も存在します。要するに、洋装姿と和装姿共に八重は着こなしていたことになります（資料⑤）。これを八重が自身の立ち居振る舞いに合わせて使い分けていたと考えました。宣教師である襄は当然洋装ですので、八重はその婦人としてふさわしい洋装を時に選択し、また日本人であることの表れでもある和服も着ていたと考えられます。

次は八重と襄の夫婦仲はどのようなものであったのか、これを考えました。すでに八重が襄との結婚を前向きに捉えていたようだとお伝えしました。この考えは二人が死別するまで変わらなかったと考えられます。それでは、襄は八重に対してどのような気持ちを抱いていたのかが疑問となりますが、これを知る手がかりは襄が八重に送った2通の書簡です。襄が八重に書いた書簡は同志社に2通所蔵されています。注目すべきは書簡の長さです（資料⑥）。1通目は1880年（明治13）2月25日付で252センチ、2通目は襄が永眠する19日

前の1890年（明治23）1月4日付で224センチです。紙と筆で遠くの人物に気持ちを伝えるしかない時代に2mを越す長文の手紙を送った裏の八重に対する気持ちを察していただけだと思います。また、手紙とは特にプライベートな相手を想定する場合、その性格上受け取られる相手にしか内容を読まれることはない想定されています。裏も自分が妻に書いた手紙を他人に読まれるとは想定していないと思います。そのため、1通目には15日間にわたる毎日の出来事をつらつらと書き連ね、喜びや悲しみの共有もありますが、冗談も入っていたりします。2通目は死を覚悟した裏が自身の高齢の母親の面倒を優先するよう、裏のもとへ行きたがる八重を制止する手紙です。夫婦のプライベートな内容が含まれたこれらの手紙は二人が心の通った夫婦であったことを示しているように思えてなりません。

さて、次ですが、裏永眠後の八重の活動の意味を考えてみたいと思います。1890年1月23日に裏が永眠した後、八重は失意の余り体調を崩すなど心身ともに疲れ果てていました。しかし、3カ月後の4月26日、八重は日本赤十字社（以下、日赤）の正社員として列せられます。ここでいう正社員とはいわゆる会社の正社員とは異なります。日赤に年間3円を寄付する人物に贈られる称号のようなものです。つまり、支出を以って積極的に関わらなければ日赤の正社員となることはできません。

日赤についてですが、そもそもは1877年（明治10）の西南の役のときに敵味方分け隔てなく傷病兵を看護した博愛社が前身になります。博愛社の活動方針、すなわち戦時看護を引き継いだ団体が日赤です。よって、日清・日露戦争が勃発した折に自ら育成した看護婦を従軍させることは当たり前のことでした。そして八重は日赤の篤志看護婦として従軍します。従軍と申しまして、清やロシアに行くわけではありません。日赤が戦地に船を出し、傷病兵を乗せて戻ると、全国の各港で兵を下ろします。その兵らは各港にある病院に収容されます。その病院に篤志看護婦が向かうわけです。八重もその一人でした。

ただし、私には疑問がありました。八重は日清戦争従軍時49歳、日露戦争従軍時60歳です。当時としてはかなり高齢です。なぜ高齢でも従軍する価値があるのか、素朴な疑問でしたが、八重が残した数多くの篤志看護婦関係の写真と帽子がこの疑問を解決してくれました。まず、八重が従軍したときの代表的な写真2枚を準備しました（資料⑦）・（資料⑧）。日清戦争と日露戦争時の看護風景ですが、八重に注目すると不自然なことに気がつきます。他の看護婦が看護活動をしているなか、八重は特に何もしていないように見えます。当時は看護婦という職業が一般的ではないなかで、このような写真を残すとなれば、八重は何をしているのかと言いたくなる方もいるでしょう。そこで、もう一つ写真を準備しました（資料⑨）。集合写真ですが、いくつか不自然なところがあります。一つは八重だけが年長です。あとは若い女性です。二つ目は右下の犬、背景の木、足元の芝をよくご覧いただくと、犬は人形、木は絵、芝は人工的な芝であることが分かります。つまり、この写真は写真館で撮影されたものです。しかし、この写真撮影時はまだ八重らが篤志看護婦として従軍しているときにあたります。従軍中でも八重は姿を残すことに意味があったと考えることが筋かと思います。そうでなければ先の看護風景の写真の説明が難しくなります。ちなみに先ほどの集合写真の裏面に「新島監督殿と写」とあります。やはり、従軍時、八重は監督官として従軍していたということになります。

これをさらに証明する資料が八重旧蔵の篤志看護婦の帽子です（資料⑩）。写真と見比べると分かりますが、全く違います。実はこれは篤志看護婦のなかでも婦人会に属する人びとが所持していた帽子です。当時発行されていた『日本赤十字社篤志看護婦人会会報』の裏表紙にあるスケッチと全く同じです。この婦人会とは当時社会的な重要性が十分認識されていなかった看護婦という職業の尊さを世間に知らしめるべく、日赤の正社員以上の資格をもつ女性たちで構成された会です。東京に本部、各地に支部がありました。創設は有栖川宮熾仁親王妃董子で、多くの華族の子女が属しました。つまり名のある人物や家庭の子女が共に看護婦の活動に関わることで、その重要性を知らしめる広告塔のような役割も果たしました。ただし、彼女らの看護婦の技術に不安があることも確かですし、実地でどの程度まで活動したかは分かりません。しかし、八重が日清戦争から日露戦争の10年間で婦人会や日赤では看護実習を行い、一定程度の技術を身につけていたことを付しておきたいと思います。

最後の事例としては、やはり八重の会津への想いを知りたくなりますが、これは八重が残した写真が今の私たちにその想いの深さを示してくれます。先ほどお話ししましたが、新島家旧蔵写真600点の未整理写真がありました。これを整理していると22点の会津若松関連写真が出てまいりました。その被写体を見てみると、1874年（明治7）に取り壊される前の若松城天守（資料⑪）・若松城天守と鉄門・さざえ堂・東山温泉・御薬園・噴火後の磐梯山・飯盛山白虎隊士の墓などがありました。これらの写真の約半数には裏面に書き込みがありました。八重が直筆で写真タイトルを書き込んでいます。どうもこれらの写真は少なくとも明治21年以降に撮影されたもので、おそらく会津若松で現在のポストカードのように販売されていたものと考えられます。八重は何度が会津に里帰りしていますが、購入時期は不明ながらも自身で購入したと考えられます。写真はきわめて鮮明で、例えば白虎隊士の墓の写真などは墓碑に刻まれた名前まではっきりと見て取ることができます（資料⑫）。八重がかつて銃の撃ち方を教えた白虎隊士伊東悌次郎の名前もはっきりと見えます。八重がどのような気持ちでこれらの写真を所蔵し、今日まで残したのか、その気持ちを現代の私たちは多少なりとも推し量ることができるのではないかと思います。

写真といえども1点、八重の会津に対する気持ちを物語る写真があります。それは1928年（昭和3）11月17日、京都黒谷の金戒光明寺にある会津墓地で撮影された集合写真です（資料⑬）。この年は、旧会津藩出身者にとっては重要な年でした。戊辰戦争からちょうど60年を迎えたこの年、かつて朝敵とされた汚名を晴らす出来事がありました。松平容保の孫・勢津子と昭和天皇実弟秩父宮雍仁親王のご成婚です。会津出身者の心の間を取り払う出来事でした。京都にいた会津出身者にとっても同じで、この年に開かれた秋季例会では東京からも会津出身者が集い、会津墓地で集合写真を残しました。八重もその一人でこのときの集合写真を所持しています。その裏面を見ると八重の名前、撮影された日付と場所、そして八重自作の和歌が墨書されています（資料⑭）。この和歌はこのときの八重の心をよく表しています。「千代ふともいろもかわらぬ若松の木の下かげに遊ぶれつる」。60年という月日が過ぎようとも、会津の名に集まる人びとの想いの強さを表しています。故郷への憧憬や愛情がいかに深いかは現代の私たちにも分かる部分かと思います。

おわりに

私が考える限り、少なくとも八重は何か新しいことを為した人ではありません。しかし、自分の社会的地位、例えば裏の妻として、京都の著名な女性の一人として、時代を生き抜いた女性です。しかし、その生き方は自由を求めるというよりも、戊辰戦争という時代の変革期の戦いに身をおいだ人間として、いかに生きるかを模索しながら、着実に自分自身の価値を模索し、発見し、実践した人生であったと考えます。その生き方は一見地味に見えますが、広く世の中に目を行き渡らせ、積極的に参画しようとしたその姿勢は現代の私たちも学ぶべきことではないかと思います。